

昭和五十八年六月二十六日 郷土研究会資料

第一二四回

史跡めぐり資料(文京区他)

湯島天神

神田明神

湯島聖堂

小石川後樂園

越谷市郷土研究会

第一二四回 史跡めぐり案内

と き 六月二六日(日)

集合 越谷駅前——午前八時三〇分集合(人員点呼)——九時一分発中目黒行き

行 先 越谷駅——北千住 乗替——千代田線 北千住——湯島駅下車

コ ー ス 湯島天神(明神鳥居・泉鏡花筆塚・奇縁氷人石)

神田明神(大盤石・鉄製大天水桶・山車)

湯島聖堂(仰高門・入徳門・大成殿・昌平坂)

国鉄お茶の水駅——飯田橋駅下車——小石川後楽園 函徳亭(昼食)

* 庭園の見方について……講師、京都林泉協会 在京理事 水島 信一氏

園内周遊

帰路……国鉄 飯田橋駅——秋葉原 乗替——日比屋線秋葉原駅——越谷駅(解散)

理事 中村 忠夫

参加費 千八百円也 (交通費・入園料・資料代他)

但し、昼食は各自御持参下さい。

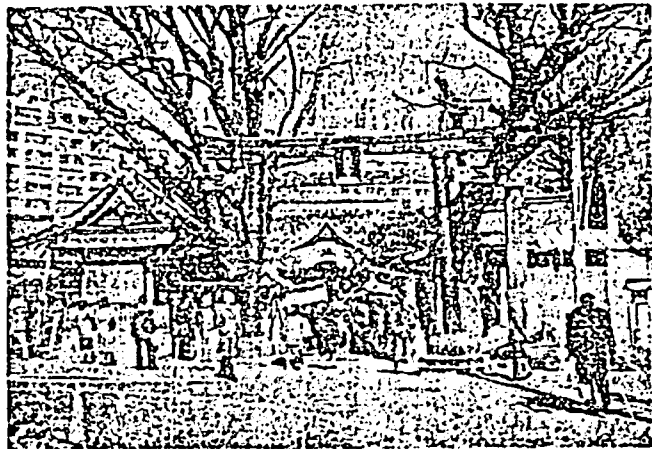
越谷市郷土研究会

越谷市 東越谷 四一九一

市立図書館内 TEL(65)2655代

湯島神社

▼文京区湯島三丁目三〇
▼地下鉄湯島・上野広小路駅下車



学問の神様として知られる湯島神社 (湯島3丁目)

まっすぐ北へ伸びる道を進むと、突きあたりが湯島神社(湯島三丁目三〇)一、俗称湯島天神である。いま来た道は左折する。曲らないで進むと、そこは表参道で、正面に社殿が見える。参道の入口に鳥居がある。鳥居は柱に寛文七年(一六六七)、同八年の刻銘がある都重宝指定の銅造り明神鳥居である。台輪を含む柱の長さは三・八メートル、笠木上端の長さは六・八メートル。この鳥居は「都内に遺存する銅造鳥居として時代も古く、製作も優秀」(『東京市の文化財』)と高く評価されていた。ところが、この稿を書く直前の昭和三十一年一月二三日、乗用車が激突し、崩壊してしまった。しかし、幸にして、同年二月二十六日に復元された。

湯島神社の祭神は、学問の神様といわれている菅原道真で、入学試験時期になると境内は入試突破・入学祈願の参詣人で雑踏する。湯島の白梅——

こんな歌謡曲の題名がある。ここは梅の名所でもあり、シーズンになると、花見客でにぎわう。

縁起によると、文和四年(一二三五)

五月、湯島の郷民が豊夢をみて古松の下に勧進し、文明一〇年(一一八五)に改築竣工した。



湯島天神の概

(一)湯島神社といふ。文京区湯島三丁目三、湯島台突松にあつて、上野の右地に對してゐる。境内二千五百九十三坪(一合)〔寺社地上〕。文和四年二月、菅原道真により古松の下に勧進し、大田道灌再興すと伝えられる。二月十日、十月十日の祭礼には、二十五坪の湯花神社を行ない、二月十日には四軒(一七七坪、山二、刀一)を、(『東京府史』)では十月十日、十月十日には、奉納を神前に供え、また氏子に配つた。天正十九年以前は五軒、北野山(湯島寺口)〔豆木寺末〕が別当をもち、五軒を行なつた。〔湯島に「別当」と見え、眞實に別当寺もあつた。かつては湯島もあつた。境内に菅原道真、菅原朝、菅原小原もあつた。江戸市民の祭神の一であつた。〕
 (二)湯島神社、本願寺、切通し(同じ)石段路に所在。〔寺社地上〕には、江戸大森神社とある。湯島中左の「戸部」がそれ。戸部、十月十日はこの社祭とも。



湯島神社の参子石

四七八) 大田道灌が再興した。現在の社殿は、明治一八年(一八八五)に改築竣工した。

本殿に向かつて手前の右手に、上野広小路方面へ下る石段が二つある。まっすぐに下る急な石段を男坂・天神石坂という。坂上で男坂と分かれ、崖沿いに左へ迂回して下る坂を天神女坂といい、単に女坂とも呼ぶ。女坂の坂上には、「女坂 湯島六丁目」と記した角柱型の石標が立っている。

境内の碑——奇縁米人石・菅公遺談碑(明治二六年建立)・菅公千年祭祀記念碑(同三五年建立)・戦利兵器奉納ノ記(同四〇年建立)・征塚(宇は國土頭山崎、大正一五年又建立)・泉鏡花筆塚(昭和

一七年建立)など。奇縁米人石は碑ではない。高さ約一・八メートル、方約二五センチの石柱で、前面に「奇縁米人石」、右側に「たつぬるかた」、左側に「をしふるかた」と刻字されている。迷子が出ると、子の名を書いた紙を右側に貼って探し、見つけた人は左側にその旨を書いた紙を貼

って知らせる。江戸時代人の生活の知恵を感じさせる石柱といえよう。一般には、迷子石、といった。「まいごのしるべ」と刻む、浅草寺境内にある石柱と同種のもの。部内にくつか現存しているが、湯島天神境内の迷子石が江戸最初のものといわれている。

湯島神社を出て、春日通りを本町三丁目方向に進むと、右手に天沢山禰祥院(湯島四一三七)がある。寛永元年(一六二四)、春日局の願いによって、二代将軍秀忠が建立させた寺で、初め報恩山天沢寺といった。同一年、三代将軍家光の命により禰祥院と改称し、天沢山と号した。開基は春日局である。

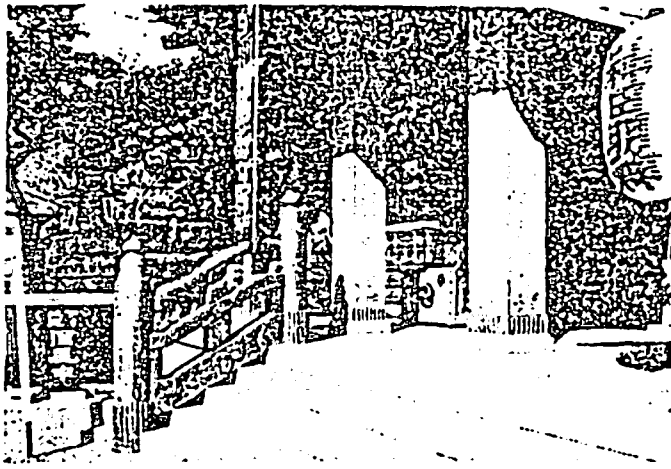


春日局歸還の禰祥院 (湯島4丁目)

湯島天澤宮 要隠明神の北の方にあり。太田道灌江戸の跡、助村にありし頃(文明十年六月五日なり)。祭中に菅神に隠見す。翌朝外より菅承相親正の画像を携へ来る者あり。乃ち堂中拜する所の尊容に彷彿たるを以つて、直ちに城外の北に祠堂を営み、かの神影を安置し、且桐樹數百株を栽去、美田等を附す。即ち当社これなり。(以上「詰社一覽」)。「江戸名所記」等の書に出づるといへども、恐らくは誤りならん。豊平河天神に菅承相親正の画像と稱するものありて、かへつて当社にこの像あることなし。その論あれども安に略す。

神田明神

▼千代田区外神田二丁目一六
▼因元・地下鉄御茶ノ水駅下取



神田明神の天水桶 左端に「下り 地廻 酒席中」の文字が書かれている。

神田神社(旧名神田明神、祭神は大己貴命)は天下祭りの神社だ。元来は千代田区大手町の三井生命ビル横の将門塚のところにあったが、城の拡大につれて

郊外にうつされ、一六一六(元和二)年湯島に遷座した。平将門の反骨と非運な最期が江戸っ子気質にあったものか、江戸の産土神・氏神としてとおとばれ、九月一日の祭礼は神田っ子の意気と豪奢とを発揮する。山車は田安門から城中にはいって将軍の上覧に供したので、天下祭りと呼ばれた。境内には大慈石という力石や鉄製の大天水桶など江戸時代をしのばせるものも残っているが、現在の社殿は昭和九年再建の鉄筋コンクリート造、山門は昭和五年正月に落成した。付近は江戸時代から製造のさかんなところで、門前にはミン・甘酒・納豆などの老舗がいまも営業している。

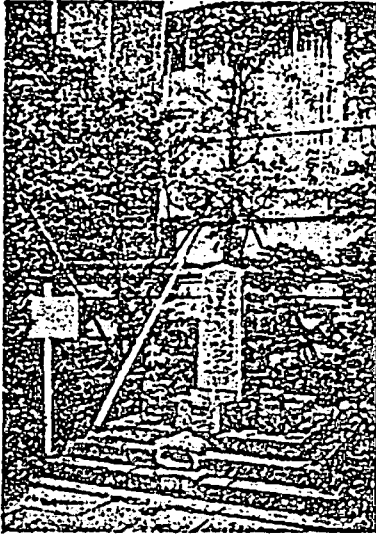
横の芳林小学校は、幕末に有馬藩士が経営した芳林堂という寺子屋が明治になって公立学校になった珍しい小学校。近くに滝沢馬琴が住んでいた。すぐ前の晋屋社は湯島聖堂で、霊橋と御茶ノ水駅はすぐである。

神田大明神の社、聖堂の北にあり、唯一にして江戸総鎮守と称す。祭神 大己貴命 平親王将門の霊 二坐

社伝に曰く、人皇四十五代聖武天皇の御宇、天平二年の鎮座にして、そのはじめ柴崎村に(その旧地神田御門の内にあり)ありし頃、中古荒廃し既に神燈絶えなんとせしを、遊行上人第二世真教坊、東国遊化の勸こゝに至り、将門の霊を合せて二座とし、社の傍に一宇の草庵をむすび、芝崎道場と号す。(今の没草日輪寺これなり)その後慶長八年当社を駿河台にうつされ、(その明日輪寺は柳原にて地をたまふ)元和二年又今の湯島にうつさせらる。その山田身を用ひて神田大明神と称す。(神主は代々柴崎氏なり)祭礼隔年九月十五日(江戸神社の祭礼は、永田馬場山王を第一とし、当社これに次ぐ。いづれも公よりの沙汰として、練物・築車等、併し美を尽し町中を引き渡す、これ一時の荘観なり。この日恐下の貴賤賤をかけて見物す)神事能(隔年九月十五日祭礼の後十六日に実行す。

一 千代田区外神田二丁目
明治五年神田明神と改称、更
のほろ、飯田町を隔て
湯島の安永町に遷座し、
千五百六十六余坪、御茶ノ水
三十三(今社明上) 境内に
田・日本館・下谷・将門に
った。社殿は昭和九年完工の
新築也。
二 芝崎の田舎近くに平将門
の塚があつて祀られたとい
が、神事との結びつきに由
りあり。明治七年別荘、民
育舎祀。例年九月十五日。
三 上野の九一(一)町、元
年正月、八十三。
四 江戸城の北にあり、唯一
にして江戸総鎮守のため祀
れ、神主となつた理由は不明
日輪寺が別荘を勤め、芝崎
神社を創設した。
五 現在五月十五日。
六 日輪寺に、中野の一八日
祭、神社の祭礼行事として奉
納される。例年九月十五日(神事
能)がある。

海の神、神田明神



平将門の首塚（ここが現在の巨大都市東京の原点である）

神田明神は、忌部族（海人族）が東京湾口にはいらず、房総半島に定着した人々の神、つまり海神であった。はじめ安房神社として祀られていたが、その分霊を奉じて浅草観音を建立した人々におくれること約一世紀後に、日比谷入江沿岸＝江戸の現在の大手町に遷したものとされる。安房国館山付近から内房そいに北上すると、潮流の激しさと、大蛇や竜にたとえられていた、

江戸湾内最大の難所、富津岬がある。

このため、いったん東京湾西岸にわたり、前にのべたように、いわゆる江戸前の海を経て日比谷入江につきあたり、その入口に彼らの神を祀ったのである。

この人々が武蔵野台地に直接とりついて、江戸＝東京を形成させていった集団の主力になったものと考えられる。

以後、現在まで神田明神が、江戸＝東

京の総鎮守として、一〇〇〇年以上も多く

の人々の崇敬的となったのである。

諏訪三社（本社）の西に並ぶ。当地地主の神なり。毎歲六月祇園会あり。

五男三女 八王子と称す。六月五日大伝馬町旅所へ神幸、同八日に

祭神 素戔嗚尊 船興あり。

大政所と称す。六月七日南伝馬町旅所へ神幸、同十四日

奇稲田姫 船興あり。

本御前と称す。六月十日小船町旅所へ神幸あり、同十三

日船興。

天下祭り

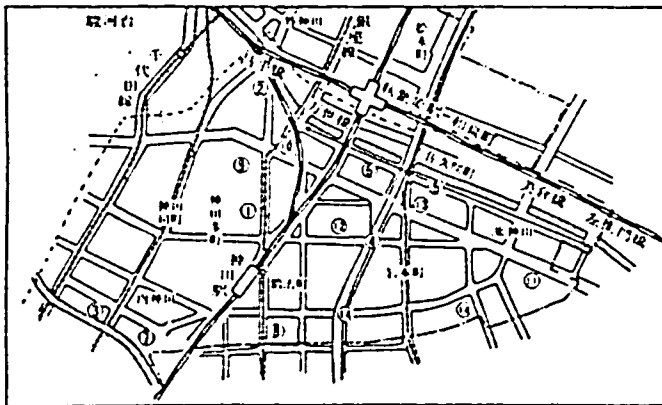
ここで、江戸時代の天下祭りについて簡単にふれよう。天下祭りとは、将軍が江戸総鎮守の明神と産土神の祭りに参加したことによる名である。

山王の氏子町は約一六〇町、明神は六〇町で、そのうち相当数が重複していた。元禄期以降、各町は山車とそれに付随する附祭りの行列で神社を出発、江戸城内にくりこみ、市中をわたった。山王の山車の数は四五番(色)、明神は三五番が定例だった。山王は子・寅・辰・午・申・戌年の六月一五日、明神は丑・卯・未・酉(亥)の九月一五日と、隔年に祭礼を行なった。

山王の氏子は大部分が中央区に拡散したため、現在は六月一五日に原盤が氏子各町を巡行するだけになった。明神の方は、約半分の氏子が中央区、半分が神田だが、神田は天下祭りを明治政府に否定されたため、やむなく町神輿をかつぐ形に変化し、現在は都内の交通量が激減する五月のゴールデン・ウィークに行なわれる。

外神田

明神と外神田「江戸切絵図」では、外神田は「下谷」の一部。おもに神田川北岸沿いと、①お成道(点線)にそった町並みである。例外的に本郷台地上の②神田明神と③湯島聖堂が入りくんで文京区と境をなす。江戸初期、将門首塚の所にあった明神が②に移されたため、湯島郷という古来からの地名にかかわらず、ここだけが神田になった。明治の神田・本郷両区境決定でもこの事情を認め、互いに突出した形になっている。現代の住居表示の方法とは大違い！ ④昌平橋、⑤筋違門橋、⑥和泉橋、⑦新し橋(美倉橋)、⑧左衛門橋までの河岸地は、江戸期から戦後まで東京の重要な流通基地だった。⑨昌平河岸が薪炭・竹木、⑩の佐久間河岸が米・材木などの荷受け地として有名。⑪万世橋は震災後の橋。



平将門事件

平将門の事件——京都政権側の表現によれば「天慶の乱」と呼ばれる、東国の紛争は、古くから多くの見方や解釈が行なわれている。

この事件を要約すると、長い間にわたり、多くの出身地や動機をもって、東国に渡来してきた人々たちも、一〇世紀にはいると、原住・先住者と新来者たちの関係は、あるいは混血し、あるいは妥協し、あるいは京都政権の体制の枠内に組みこまれながら、列島を二分する一大水郷ともいふべき利根水系を舞台に、しだいに融合していった。

しかし当時の東国は、京都政権にとってはあくまで「あずまえびす」の地であり、辺境の植民地的存在であった。

それゆえ律令制の圧力は、より強く、東国の人々のうえにきびしい搾取となつてのしかかつてきた。

将門が活躍した地域は、関東地方の水郷地帯を中心に、広範囲にひろがる。

水郷地帯だけではなく、たとえば関東山地の一角の青梅や、武蔵野台地上の府中などをはじめ、丘陵部や山地部にわたる。

将門で代表される勢力は、水郷・低地部では水田耕作と水上交通によりその生活を維持させた。一方、東国武士の特徴とされる騎馬戦の熟練者でもあった。

水路で東国に渡来した人々の文化と、東国およびその以北の地方における「騎馬文化」と呼んでもいいすぎではない馬を移動手段とする文化が、将門時代の一〇世紀前半には、さしたる違和感もないほど、一体化していたのである。

水郷と水運、平野と馬産地、この一見矛盾するような生活関係が共存していたのが、当時の東国であった。さまざまな渡来人たちが、関東平野という土地に即した独自の文化を形成したといいかえてもよからう。

こうした東国に対する京都政権の収奪は、たとえば京都を見てきたと伝わる将門にとっては、我儘のならない状況であつたらう。

将門の「天慶の乱」(承平五年・九三五—天慶三年・九四〇)は、京都側からみれば「乱」そのものだが、東国の人々にとっては「独立戦争」的な反抗であつた。



筑土神社 (はじめ田安台、戦災後一時九段中学校の敷地に移った。現在九段中坂)

将門の首塚伝説と人々の信仰

独立戦争ならぬ独立战争的反抗は、京都政権の組織力の前には、一時的紛争として処理されてしまふ運命にあった。

しかし一時的にもせよ、東国の民衆の目には、そしてその心の中には、強権による収奪に抵抗した将門の勢力は、強く深く記憶された。

下総で殺された将門の首が、その怨念で、大手町まで飛んできて、この地に落ちたものを祀ったというのが首塚である。この将門伝説は、大手町すなわち日比谷入江の東岸を形づくる江戸前島の集落の性格——江戸の、そして広くは東国の中心的流通基地としての江戸湾の性格を強く反映する伝説として、受けとるべきである。

いかえると、将門事件当時の日比谷入江江戸は、当時の東国にとっては、すでに重要な淡であったことを物語る。将門の怨念、しかもその首が江戸の神、神田明神に祀られたということは、当時の江戸の人々が将門をどう評価していたかという実例の一つである。

その後、一三世紀はじめころ、京都の権力側の宗派、天台宗の寺が神田明神とならんで草創された。浅草観音が天台宗の組織の中にくみこまれたのも、ほぼ同時期のことと考えられる。

在来の神は、仏教勢力のもとに混淆し、習合し組織化されていった。その一つの現われとして、首塚・神田明神の祭りがしだいに重要視されなくなった。そして首塚は荒廃してしまった。

このため将門の亡霊は、大いに怒り江戸湾の村民に祟った。このありさまは「病災天札枚舉にいとまめらず。村民おそるるといども、のがるるに術なく」という状態になった。

たまたま寛元年中(一三〇三—一三〇六)に、遊行(時宗)二代の他阿真教が布教のためこの地にきて亡盤を供養したところ、「盤魂のたたり退ぞき、死に向いたる者、悉く快復する」結果になつた。

このため、住僧はじめ村民ごとく時宗に改宗し、天台の寺は念仏道場となり、芝崎道場日輪寺とした。そして将門の盤を「境内鎮守の明神に配祀」したのが、神田大明神である、と『文政寺社書上』にある(この日輪寺は現在、台東区にある)。

この『書上』は、日輪寺が徳川幕府にその由緒を報告した公文書である。

首塚伝説といい、亡盤のたたりといい、今日の科学万能の世には、ナンセンスノ、一言でかたづけられてしまうような話であるが、これらの伝説が含んでいる内容は、非常に多くの意味をもっている。

原住ないし先住者の神が、国家権力と密着した仏教寺院に圧倒されていった過程。それに対する神の信奉者の抵抗が「たたり」現象であり、そのたたりをしずめるために、一所不住の遊行(移動)僧、しかも念仏を唱えれば救われるという、より民衆的な宗旨の時宗によって解決されるという話は、「神々の復活」をわがう江戸の人々の願望を物語るものといえる。

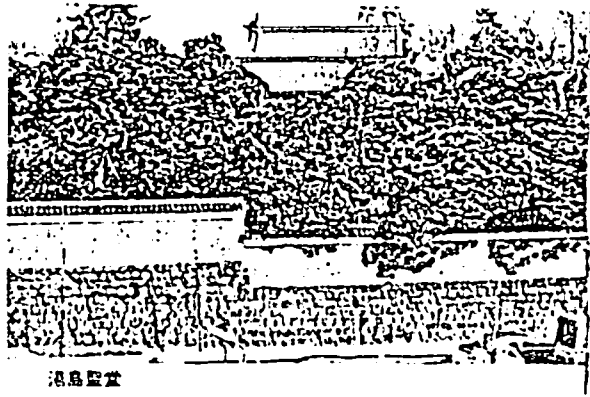
だが神の地位なり役割は、「境内鎮守」の地主神の形で復活するところに、当時の神と仏との力関係がよく現われている。

もっとも、この『書上』は、神仏混淆で、しかも仏教勢力が強かった江戸時代のものである点、相当引ききして読む必要がある。

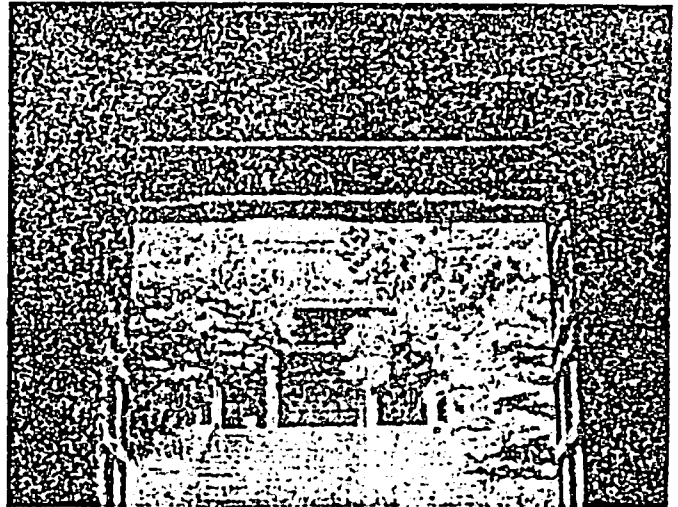
実際には、芝崎道場日輪寺と並行して神田明神に「配祀」されたとする将門が、海神の明神の主神になってしまうのだが、いずれにしろ、神田明神の本質は海神であり、海神＝水神の代名詞として、将門をもちだしたほうが江戸住民には説得性もあり、納得できるものであった。

湯島聖堂

▼文京区湯島一丁目
▼国電・地下鉄有楽町線ノ本駅下車



湯島聖堂



孔子像を安置する湯島聖堂 (湯島1丁目)

湯島聖堂(湯島一四二五)は、孔子とその高弟の像を奉安する建物で、国指定史跡である。寛永九年(一六三二)、尾張大納言徳川義直は、上野忍ヶ岡の林道春邸内に先聖殿を建て、孔子像を中心に、左側へ顔回・孔子、右側へ曾子・孟子の像を安置した。聖堂の沿革はここに始まる。

道春は江戸時代初期の朱子学者で、名を儒勝、通称を又三郎、号を菴山といい、痘髪して道春と号した人物で、慶長二年(一六〇七)師藤原愷窩の推薦によって徳川家康の顧問になった。学問をもって幕府に仕えた林家の始祖である。道春は家康・秀忠・家光・家綱に仕えて政治・文教に参与し、明暦三年(一六五七)七四歳で没した。

上野忍ヶ岡の邸地は寛永七年に幕府から給

され、造営費二〇〇両も賜わって学問所・文庫を建て、同九年、徳川義直によって先聖殿が建築されたのである。位置は現在のの上野公園内西郷隆盛銅像付近といわれている。

学問所・文庫はのちに幕府学問所湯島昌平儀とされた。先聖殿は寛文元年(一六六一)に幕府が大増築し、その後、大成殿と改称し、大成殿とその付属建物を総称して聖堂と呼ばれるようになった。

元禄三年(一六九〇)五代将軍綱吉は聖堂の規模拡張を計画し、現在地の湯島に移すこととした。

『武江年表』によると、元禄三年二月二日「昌平坂大聖殿上棟」、翌四年正月「湯島に大聖殿御普請成る」という工期を経て、聖堂は上野から湯島へ移された。同書は元禄四年二月「御聖座ありて、同十一日積奠あり」とも記している。聖座は神体の座を移すことで、積奠は孔子を祀る儀式。元禄四年二月一日、新装成った湯島聖堂で、積奠が挙行されたのである。湯島聖堂は再三

焼失し、そのたびに再建された。現在は仰高門・入徳門・水屋・杏壇門と東西両廊・大成殿がある。これらの建物は、寛政二年（一七九〇）一月に一代将軍家齊が明制にならうて建築した様式を伝えている。しかし、大正十二年（一九二三）の関東大震災のため、入徳門と水屋を残して焼失した。現存の大成殿・杏壇門・仰高門は、昭和十一年（一九三六）の再建で、いずれも鉄骨鉄筋コンクリート造り。耐火構造にした関係で、第二次世界大戦の東京空襲による火災からは幸いにしてまぬがれた。ただし昭和二十年四月一三日の空襲で、入徳門の透塼の一部と水屋などは焼失した。

湯島聖堂の中心的建物は大成殿である。そのなかに、今も孔子・顔回・曾子・孟子の像が安置されている。孔子像が奉安されているので、聖堂のことを聖廟・孔子廟ともいう。廟は死者の靈を祀る所。杏壇門をはいると、四囲を廻廊がめぐり、足下は一面石畳で、正面に大成殿が建てられている。廻廊外には樹木が繁茂し、まさに静寂荘嚴の聖地である。大成殿は南面し、規模は桁行約二〇メートル、梁間約一三メートル、内外ともにエナメルペイント塗り。屋根は入母屋造りで、銅本九葺き、大棟の両端に青銅製の鬼状頭、下り棟と隅棟の止端に青銅製の鬼竜子を置く。



昌平坂の石標

正面大額「大成殿」の字は、伏見宮博恭王の書である。殿内に奉安する孔子像は昭和十一年三月二十九日御下賜の御物で、明朝末期の儒者朱舜水が中国から持参してきたもの。

湯島聖堂の脇、お茶の水方面へ登る外堀通りの坂を、昌平坂と呼んでいる。しかし本来この坂は相生坂・団子坂といい、昌平坂とは呼ばなかつた。

湯島聖堂の東側を外堀通りから湯島坂へ登る坂が、本来の昌平坂である。「古跡昌平坂」と記した石標がその坂下と坂上に立っている。だが、この坂も初めは無名で、昌平坂と呼ぶ坂はほかにあつた。明治四〇年刊の『新撰東京名所図会』に、「昌平坂は今の大型堂の東わき、即ち湯島一丁目と二丁目との間の坂をいふ。もとこの坂は無名なりしが、寛政十年大型堂再建の際、

庭の観方

水島信一

私は考える。庭は一つのポエジイである。その歴史は古く、各時代ともにその持つ美は同じであっても表現方法は多様である。生み出されるポエジイには複雑なその時代時代の社会状況、特種な人間感情がその裏にひそんでいるから庭の観方もなかなかむずかしい。でも庭とその調和された美しさを少しでも自分の心の中に入れてたときに庭を観る心に近づいたと云えるのではなからうか。

その心のポイントをふまえたいうで庭の形をみるときに、二つの作庭の基本が見えてくる。その一つは自然に従う態度であり、いま一つは自然を造形する心である。例へば、かの有名な竜安寺の石庭に対するとき、最高の造形の美といわれる全庭の石の配置と、空間の処理の上に作庭者の永遠なるモダンへの心を見、永遠なるものへの語りを感じることが出来る。そして永遠なるが故にこそ私達は言語に絶する瞬間の美を感じるものであろう。この二つの前提があつてこそ日本庭園が大自然の景観を基底として作庭され、これはまた各時代を通じて庭園の上における一貫した理念であつた。とは云つても、大自然の景観を取り入れる点においてはその理念は一貫されてはいたが、作庭の段階においてこの大自絶を庭園として表現するために種々な方法が考えられてきた。基本的には写実主義を基調として大自然をそのまま写生的に表現されたもの、これに種々を理想が加えられて自然主義としての表

現形式をとつたもの、又、時には自然と対立する方式として象徴主義としての表現法がとられたものや、その他には理想主義に埋没するように人間の心のあるべき姿を表現しようとして作庭されたもの、あるいは極端に単純化された印象主義的なもの、さらに自然の景観のあるがままの全てを庭の中に表現しようとして作庭された縮景主義の庭も見受けられる。

この前提をわきまえながら現存し、あるいはかつて存在した庭を様式の面から類別すると池泉庭園と枯山水と路地(茶庭)との三つに大別される。又この三種類は形式的にはそれぞれ種々の形に区別されるが、この区別は主として年代的なもの即ち歴史的背景に左右される場合が多い。上古、飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町、桃山、江戸、現代と区別して考察すると、上古時代の庭は日本古来の神への崇拜から石を神格化して石を組んで庭とし、或るは池泉様式にあつても祖先神を奉斎する形式がとられた。

仏教が伝来してからは次第に観賞度加わり、浄土思想に根ざす舟遊式、廻遊式池泉が出現し、更に抽象的な枯山水庭園(室町前が前期式、室町以後が後期式)も築かれるに至つた。これが時代の流れを経て江戸期に入ると、各時代の各様式、形式が集大成(集大成?)されて綜合園の形式が生れ、俗に云う大名庭園となつて庭の大切な心が失なわれて現代に及んでいる。然し近年にいたつて庭の研究が進んで作庭の心が一部によみがえりつつあることは嬉しい。

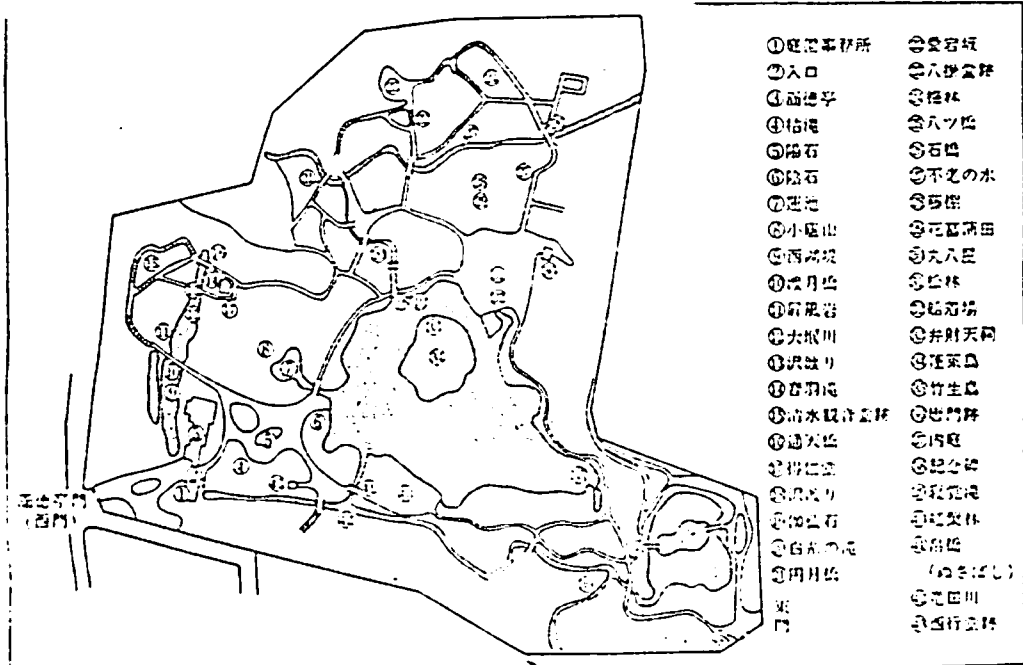
九 後楽園と六義園

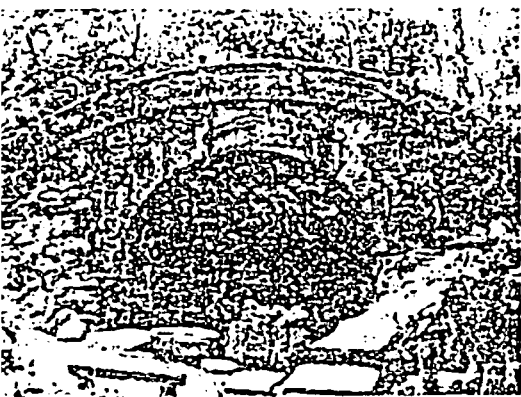
文京区内には、後楽園・六義園・育徳園と、大名庭園が三カ所も現存している。これは本区の特徴といえよう。三カ所も大名庭園が残されている区はほかにない。育徳園については、「東京大学の周辺」の項で述べた。他の二園を散策してみよう。

後楽園（後楽一六）は、水戸徳川家の庭園であった。寛永六年（一六二九）、藩祖頼房は三代将軍家光からこの地を賜わり、屋敷を造営した。のち本郷追分に中屋敷、向島小畑に下屋敷が完成し、小石川邸は上屋敷と呼ばれるに至る。小石川邸の庭園は頼房の代に起工し、二代藩主光圀が完成させた。光圀は水戸の黄門様と呼ばれて広く知られている人物。黄門は中納言の唐名である。

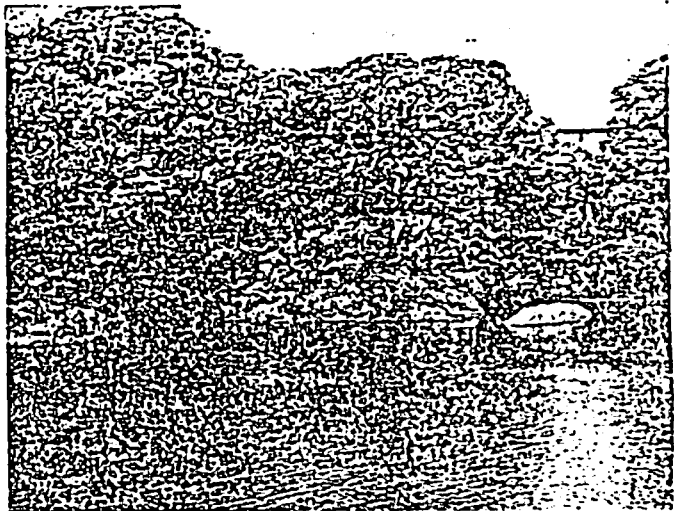
光圀は築庭に力をそそぎ、領房の工夫を尊重しながらも、自分の趣味をいかして造園した。当時亡命中だった明の遺臣朱舜水に意見を聞き、中国様式も取り入れた。光圀は舜水を尊敬し、学問上の師と仰いでいた。それで造園に参画させたという。小庵山・円月橋・西湖の長堤などは、舜水の見聞による築造で、今に面影を伝えている。

和風の中に中国風を織り込む——この庭の特色の一つである。庭園の様式は、池を中心とした廻





生野水設計の円月橋 (小石川後楽園)



廻遊式で陶澹英をつくる池泉 (小石川後楽園)

遊式。池の水は北側を流れる神田上水の水を導いた。園名は宋の范文正はんぶんてい、作『岳陽樓記』に、「士当先天下之憂而憂、後天下之樂而樂(天下を治める者は天下の憂に先んじて憂い、天下の樂しみに後れて樂しむ)」とあるのをとって、後楽園と命名した。光園に命じられ、拜水がこの一節を選んだのである。

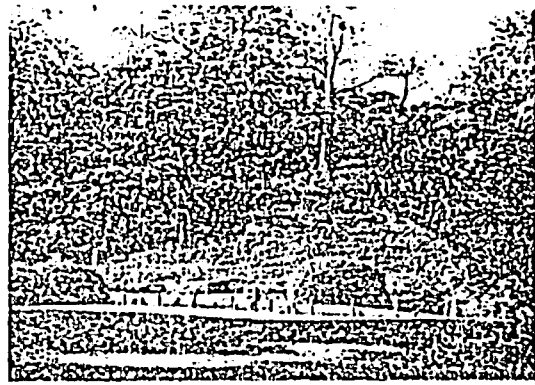
三代藩主綱条時代になると、元禄一五年(二七〇二)の改修があり、同一六年には江戸大地震のため損傷し、庭園の景観が変わって行なわれた。桂昌院が歩行するのに危険ということで、奇岩・大石を除去し、改修を加えたのであった。そのため、豪壮をきわめた景観がいちじるしく減殺されたという。

享保三年(二七一八)七歳の宗堯しゆぎょうが四代藩主を継いだ。しかし幼少のため、実父の高松藩主松平頼豊が藩政を補佐した。水戸藩主的な立場にあった関係で、頼豊は後楽園を自分の好みに改めた。鳴門をはじめ、金毘羅堂・八幡堂(霞崎石清水八幡)などを造り、四国の景を取り入れ、園景は一変したといわれている。その後、文政一二年(一八一九)斉昭さいしょうが九代藩主になると、創造時代の方針に従って復旧した。しかし安政二年(一八五五)の江戸大地震で多大の被害を受けた。

明治維新後、広大な水戸小石川邸は兵部省ついで陸軍省用地とされたが、庭園部分は陸軍の秘園として保存された。大正一二年(一九二三)史蹟名勝に指定され、昭和十一年(一九三六)文化財として一時期、文部省所屬

紋に公開されるようになった。現在、正式には、小石川後楽園^{せうらくえん}、といひ、特別史跡および特別名勝に指定されている。管理者は東京都。園内の建造物は関東大震災のため、唐門・西行堂・九八屋・得仁堂を除き、すべて焼失した。残ったものも、第二次世界大戦の空襲で、得仁堂以外はい

ずれも焼けてしまった。



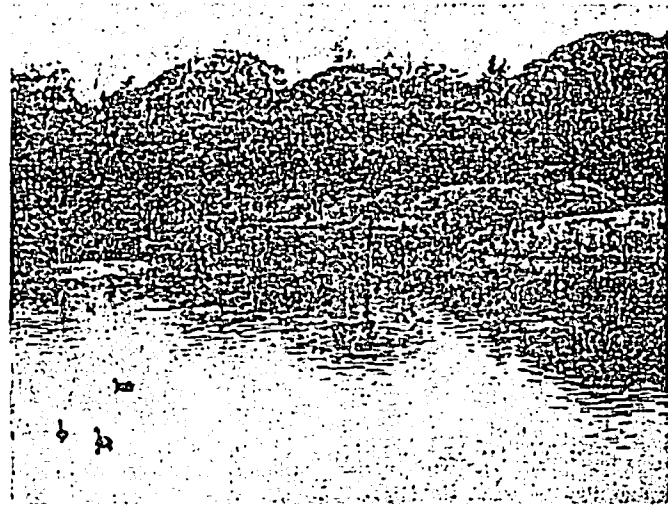
美しい小嵐山の築山 (小石川後楽園)

立て、園内現存の建造物中、最古のもの。大池南岸には、庭の西部から東部へ、竜田川^{りゅうでんがわ}が東流し、下流に寝覚滝^{ねさめたき}がある。竜田川の末は神田川へ通じ、かつては舟の出入りできる堀だったといふ。竹生島・白糸の滝・愛宕山・ハツ橋等々、諸園の名勝を模造し、その名をとって園内の名勝としたものが多い。中国の名勝をとったものもある。紅葉林・枯滝・松林・花菖蒲田^{はなしょうぶのり}・藤棚・梅林も造られている。これらと一つ松は園独自の名勝といつてよいだろう。また園内至るところに、灯籠・碑・奇岩・珍石がある。名勝とそれらをたずねながら、園内をめぐる。そのために遊歩道は四通八達し、石段・橋・沢渡りも造られている。園景も一歩ごとに変わり、楽しい。まさに廻遊式庭園である。

園内をめぐる。大池があり、池の中央に蓬萊島^{ほうらいじま}、東側に竹生島^{たけなまじま}が浮かぶ。池北岸には築山^{つきやま}があり、細流があつて白糸の滝^{しらいすのたき}が落ちる。築山の北方にまた築山^{つきやま}があり、愛宕山^{あたごやま}という。築山と愛宕山の間には川が流れ、上流は溪谷^{けいこ}の趣^{おもむき}を呈して円月橋^{えんげつばし}があり、中流にハツ橋、下流に石橋^{いしはし}がある。大池に鋭く西側の小さな池は蓮池^{れんち}という。その西岸の築山^{つきやま}が小嵐山^{せうらんざん}である。小嵐山西方に南北に伸びる池があり、南部を西湖^{せいこ}、北部を大堰川^{おおいせがわ}と呼び、両者をわけて渡月橋^{わたげつばし}を架す。西湖には長堤^{ながてい}がある。大堰川には音羽滝^{ねばたき}が落ち、北端に通天橋^{つうてんばし}が架設されている。その西岸は清水観音堂^{しみずくわんおんどう}跡のある築山^{つきやま}。渡月橋^{わたげつばし}の東方、植込みの中には、得仁堂^{とくにどう}がある。堂は光園^{ひかりえん}の建

六義園（本駒込六一一六―三）は、柳沢吉保が別邸内に造園した庭である。吉保は初名を所安・保明といった。万治元年（二六五八）上野園館林藩の勘定頭・安忠の子として生まれた。藩主綱吉の小姓となり、延宝八年（二六八〇）綱吉が五代将軍になるにおよんで、幕府御小納戸役に任じられた。以後、綱吉の信任を得て、側用人・老中・大老と昇進し、川越城主（七万石）・甲府城主（二五万石）となった。その間、出羽守の官を受け、松平の姓と綱吉の一字を賜わり、松平出羽守吉保と称した。宝永六年（二七〇九）綱吉没後、六義園に隠居し、正徳四年（二七一四）園内で没した。

元禄八年（二六九五）四月、吉保は幕府から四万六〇〇〇坪余の土地を給され、自分で設計・指揮し、七年余の歳月をかけて庭園を造り、「六義園」と名づけた。園名は中國の古書『毛詩』（詩經）の別名（の記す六義、『古今和歌集』序の和歌の六義にちなむ、『毛詩』の六義は風・賦・比・興・雅・頌。和歌の六義は、そえ歌・かぞえ歌・なすらえ歌・たとえ歌・ただこと歌・いわ



六義園の池泉と浮島（本駒込6丁目）

い歌である。吉保は字を好み、和漢の書に通じ、ことに歌道にくわしかった。造園に際し、園内の模様は詩歌の六義を象徴させ、六義園と命名したといわれている。吉保自身は日本風「むくさのその」と呼んだらしい。『六義園記』では、そう読ませている。

吉保は、園内の景勝地八八カ所を選び、日本・中國の名所・故実・歌比などから呼び名をつけ、標柱を建てさせた。花崗岩の標柱はいくつか現存する。標柱の文字は家臣で園学者の細井広沢が書いた。したがって、今も園内の地名は多い。六義園十二境の和歌によると、「初入岡・芦辺・藤代根・若の松原・紀の川上・嶺の花園・霞の入江・藤の里・玉藻磯・出沙溪・妹背山・新玉の松」の十題名が付され、二二カ所の地名が知れる。十

二境、の和歌は、吉保が園内一二景を絵にして京都に送り、公卿たちに和歌を求めたもの。

吉保没後、庭園は荒れた。明治初年、実業家岩崎弥太郎の所有となるにおよび、旧態を補修し、再び昔の美観を取り戻した。ついで昭和十三年（一九三八）三月、岩崎家から市民観賞・休

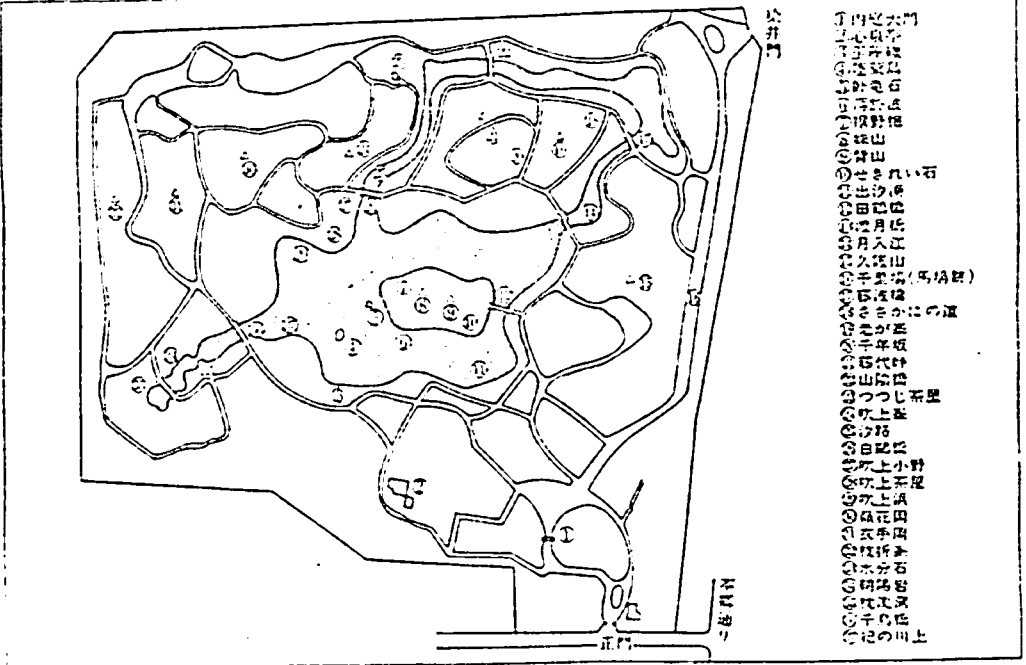


築山と池泉汀の妙枝（大庭園）

養の地として、東京市に寄贈された。東京市は同年一月から一般に公開し、同一五年八月、史蹟名勝天然記念物保存法に基づき、名勝に指定され、同二年四月、文化財保護法によって、特別名勝に指定されて今日に至っている。現在、東京都で管理。庭園の形は廻遊式築山山水庭といわれ、園内をめぐり歩いて景観を楽しむように造られている。

園内を歩こう。正門をはいり、内庭大門（昔は遊芸門といったか）をくぐり抜ける。庭園の中央に大きな池がある。池の水は千川上水の水を導いていた。池の南岸は芝生の平地で、内庭大門をはいってきたところ。池の三方は築山に囲まれている。東側の一番高い山は久護山という。北側には、東から老が峯・藤代峠・吹上峯・嶺花園と

並ぶ。西側には衣手岡、その西に枝折峯があり、西南端の山の名は不明。だが、そこには水石・朝陽岩があり、滝が落ち、滝見茶屋もある。滝の水は流れて、千鳥橋の下をくぐって大池にそそぐ。その辺を紀の川上と呼ぶ。大池南岸の西側は玉藻磯、東側は出汐灘である。大池西北岸を吹上浜という。池中には、小さな蓬萊島、大きな中ノ島が浮かぶ。中ノ島の山頂を妹背山と称す。島は田鶴橋で大池の東岸と結ばれている。田鶴橋は土橋。その景観は園内橋梁中第一といつてよい。大池東北端に石橋がある。橋名は渡月橋。その下の水路は老が峠・藤代峠の北側をめぐり、白羽橋下をくぐって大池に至る。途中に菰波橋・山陰橋がある。山陰橋の位置は藤代峠の北麓で、いかにも山陰の橋。遊歩道は築山の下、築山の間を通り、大池を一周する。山間の道は堤筋がある。しかし、山頂には園内最高峰の藤代峠しか登れない。その山頂に立って、南方を望む。眺望絶佳である。大池と築山と水路——その間を遊歩道が走り、道を進めば、一步ごとにそれらの景観が変わる。まさに廻遊式築山山水庭である。



日本庭園史概略

上古における庭園の源流

日本の庭が起る以前に、庭の源流となつたものがある。日本の庭は応仁の乱（一四六七—一四七七）のあった直前までは、池庭ばかりであった。乱後に枯山水が起り、天正期（一五七三—一五九二）から路地が起つて、大きく三大別されるが、最初は池庭ばかりであった。

池庭は、もともと海の表現であつた。日本は海にかこまれた島國であるから、海島に祖先人をまつり、または海の景がもつとも視されたので、その海の景を随景的にあつかつたのが池である。

上古では、池に中島を作り、中島に神をまつり、または宮殿を作つた。中島を直線の三島式とするのは宗像式宇佐式で、三角形に配島するものは大伴に出雲式である。しかし三島にかぎらず、五、六島以上の多島式のものもある。あるいはまた、秋津島形のものもあつて、これは蜻蛉（あきつ）の腎帖（となめ）してゐる姿といわれたものである。

さらに一方、日本の庭園には、石を枕々に組むことが最初から行なわれたが、この石を組むことは、上古ですでに起こつてゐる。磐座（いわくら）とか磐境（いわさか）というものがそれである。上古では石を神格化し、石そのものを神として崇拝する場合に磐座があり、石を神格化するとともに、その石を円形または楕円形に配置して、その中を神聖な地として神をまつるものを磐境と称してゐる。

これらの池の形や島の配列、または石の配置や組み方が、後の庭園の源流となるのであるが、それかといつて、上古では今日の庭園といふ得るものはなかつた。

飛鳥奈良期の庭園

飛鳥奈良期（五五二）にはいると、日本に仏教が正式に伝来し、須弥山（しゅみせん）思想がはやり、これより前からはいつていた中国の蓬莱（ほうらい）思想もさかんになり、かつまた、中国の庭園の影響もあつた。周の景華台や、漢の上林園や、南北朝の玄武湖の園池等々の影響もあつた。隋の煬帝が、このころ五湖四海を作つて、蓬萊、方丈、瀛州（えいしゅう）の三島を作つたことは有名であるが、推古二十年（六一二）には橘化人路子工（みちこのたくみ）が南庭に須弥山を作り、この須弥山は奈良期では度々作られた。

さらに推古三十年（六二二）には蘇我馬子が自島に中島のある池庭を作つたので、時の人々は彼を島大臣（しまのをとど）と評した。天智八年（六六九）には園城寺（おんじやうじ）が創立されたが、今日保存されている開池井（あかい）の石相は弘文帝開池の一部であつた。天武十年（六八二）には、橘島宮ができて、これに池庭も完成した。この池庭には湖池（すはま）の景や荒磯（ありそ）の景も作られ、これが後世の庭園に大きな影響をもつてゐる。

また、和銅三年（七一〇）には橘諸兄（たちばなのもろえ）が山城井手に池庭を作つたが、近年まで保存されていた。天平勝宝四年（七五二）には大伴家持が池庭を作つた。天平宝字三年（七五九）には、唐招提寺宝蔵東前に前庭池が作られ、三重塔下には龍池もできた。奈良期では、このころ多くの庭ができたが、今日保存されてゐるものはほとんど皆無である。いずれも広大な池庭であつた。

平安期にはいると、早くも延暦十三年（七九四）には、神泉苑ができた。今日その一部を保存しているが、原形はまったくみられない。神泉苑は実に代表的な名園で、広大な池庭であった。弘仁元年（八一〇）には南池院が、四條堀手の西北鴨川のそんでできていた。同五年（八一四）には嵯峨院の園池ができたが、これが今の大沢池庭である。中島や夜泊石の岩島や名古屋の滝も保存されているが、もとより昔日の面影はみられない。

天安元年（八五七）には冷泉院の池庭ができて、美泉をほこっていたし、貞観（じやうがん）元年（八五九）には入康親王が入道して、山科四宮の池庭を作り、紀州千里から庭石を運んだということである。同十五年（八七三）には、源融（みなもととほる）が河原院の園池を作ったが、今も沙成園としてよく保存されている。中島の石組や地割は平安期の様式と手法とをよく保存しているので参考になる。

このころの池庭は、底部に粘土を厚く張り、その上に貝呂大石を入れて舟遊に使っている。

平安期の池庭は広大で、詩歌管弦にふけるために、池中には竜頭釣首（りゅうとうけしゅ）の船を浮べて景を賞したのであるから、多島式の中島の変化によって、時々刻々に景の変化する様をたたえたのであった。融は別に嵯峨に櫻露殿（せいかかん）の園池や、宇治にも池庭を作った。昌泰元年（八九八）には、朱雀（すざか）院の園池ができて、江戸時代まで保存をされていた。

このころすでに山城宇治郡の大領宮道（みやじ）弥益が池庭を作っていたが、これは今の勤修寺の池庭である。中島四島はよく保存されている。延喜十五年（九一五）には寧子院の池庭ができていたが、傑出した名園であった。このころ京極殿の池庭や高麗院（かやのいん）の池庭も傑出していたが、高麗院の庭は藤原頼通が作庭したもので、四季の庭であった。彼は作庭の秘伝書「作庭記」を所持していた人で、修理大夫俊綱の父であり、ともに作庭に傑出していた。このころは北家藤原氏の人々が作庭の伝を得た人々で、その一派の人々の作庭が多かった。

長治元年（一一〇四）には、藤原清衡が、奥州平泉に毛塚寺（もうつじ）を建立したが、毛塚寺の池庭は今日

なおよく保存されていて、中島の石組や崖岸も保存され、または千瀉（ひがた）様の洲浜があつて、これによつて、作庭記流の作者の庭であることがわかる。少し前の寛治元年（一一〇八七）には、鳥羽親宮が造営され、南北八丁（約八六〇m）東西六丁（約六五〇m）の大池庭で、池水は海のようなたとのべている。今日発掘調査中である。

この時代の末期、平清盛は八條の露に池庭を作り、その子重盛は治承元年（一一七七）に小松山荘の池庭を作った。これが積翠園（しゃくすいえん）として今日保存されているのである。

当代の池庭は大きく、地割は寝殿の前を広く開けて、左右に池庭を入れ、その池庭にのぞませて泉院や釣殿を作ったから、地割は凹字式となった。そしてすべて舟遊式とされた。

また石組は池中の岩島は人字形に二個の石を寄せて立て、護岸は三重五重とかさねて作っているし、滝の三折石組のごときは、平面が正三角形となり、礫石風を立て方ながら、聚庭で、しかも優美な手法であった。

鎌倉南北期の庭園

源頼朝が、鎌倉にくだつて開もなく、元暦元年（一一八四）に北面に石畳を作った。蓬萊式の池庭であった。文治五年（一一八九）には永福寺を創建して池庭を作ったが、このときは京都から静玄という作庭家がついて作った。一丈ばかりの立石を立てたと吾妻鏡（あづまかがみ）にのべている。

建久（一一九〇）にはいったころ、藤原師貞（もちずみ）は、今の西芳寺の地に鏡土（えとど）浄土の二寺を再興したが、このころすでに今の西芳寺池庭はできていたことを、実地の地割、その他でうかがうことができる。西芳寺庭は後に夢窓国師が草舎を建立したり、一部修理したが、実際はこのころの池庭で、作庭記流の露形（かすみがた）の中島のあることでもわかる。元久（一一〇四）になると、後京極良経や、その弟子定家なども

室町期の庭園

作庭に傑出していた。良経の中御門殿の庭はとくに傑出していた。元仁元年(一二二四)には、西園寺公経や、その子実氏が北山山荘を作ったが、これが後の鹿石寺(ろくおんじ)(金閣)の庭として、今日保存されているものであって、定家なども作庭を手伝っている。金閣の庭は広大な池庭で、萍葉、方丈、瀟湘、壺梁(こりょう)その他の中島が多く、丸山八面石(くせんはっぺいせき)、その他の岩島も多く、多様な池庭で、鎌倉初期に近い庭として最高に傑出してゐる。

室治二年(一二四八)には、後醍醐院の龜山仙洞の池庭ができたが、池だけは、平安期の天延三年(九七五)ころに、源兼明が作庭していたものを利用した。そして仙洞のできた直後に建長寺開山の蘭溪道隆をして龍門の麓その他の石を組み改めさせた。それが今の天龍寺の庭である。後に夢窓国師が本寺を開山した関係で、夢窓の作庭と伝称されたが、この龍門湯の鯉魚石を上部に組んで、まさに鯉魚が龍に化す姿のものは道隆独自のもので、弘長(一二六一)ころに、道隆が再興した甲府の東光寺や、直後にできたと思われる信州光前寺の庭は、いずれも同系のものである。

このころ米子市那尾の深田氏の庭ができたが、鶴亀の石組としては最高に傑出してゐる。当時の庭に、鶴亀はなかったと主張する字者もあるが、鶴亀島の表現は蓬萊島のこと、鶴の表現はすでに上古からあって、鶴島とことさら主張しなかっただけのことである。永仁二年(一二九四)には南禅院の亀山燈宮ができていた。三級岩の立石は、前記深田氏のものと同様にして、よくこの時代の作庭を語っている。

この時代の作庭としては甲州の慧林寺(えりんじ)、美濃の虎渓山永保寺その他多いが、足利尊氏の作った常在光寺の庭が、今の知恩院の庭として保存され、このころの二つの池を接近させた一種の瓢形池庭は、よくこの時代の地割を示している。

この時代の池庭は洲浜形のものも多く、前期の舟遊から廻遊式のものとなった。武家寺院建築に対する要求である。池庭には、築山や野筋(のすぢ)も作られ、池の中島には多くの立石が用いられ、石構もはじめて用いられた。前期の寝殿式即ち作庭配流の庭に對して、母院式の要求による武家好みの別荘が起こって革新的な庭ができたことは特色である。

このころでは、足利義満が、北山山荘を西園寺興永からゆずり受けて修造し、鹿石寺の庭としたのが、前述のように、これは鎌倉初期にできていたものである。當時の大名の中でも、大内氏、細川氏、赤松氏はそれぞれ庭園を愛好した。

大内氏は京都に飛鳥亭の庭を作り、永享二年(一四三〇)には、細川右京大夫も自邸に作庭した。同年足利氏は室町殿に池庭を作り、これは河原者が作った。このころから末期ころまで、足利氏を中心とする作庭は河原者が作者であった。中でも吉阿弥、文阿弥、左近四郎、その他の人々が多く活躍した。當時の庭石は二〇〇〇—三〇〇〇人の人々で引いている。

室町初期の作庭で、今日現存しているものは、鳥取県の小川氏邸、西条市の保國寺、滋賀県の唯念寺(ゆいねんじ)などである。立石が非常に多いのに気がつく。いつの時代にも、作庭家に西家は多いが、このころでも雷舟のような悪僧が大いに作庭した。寛正(一四六〇)には雷舟が東福寺の芬陀院(ふんだいん)に作庭したが、今も保存されている。

文明(一四六九—一四八七)ころには、舟舟も大いに作庭に活躍し、彦山の龜云坊、山口の常樂寺、益田の萬福寺、医光寺の名庭園を作ったが、いずれも保存されている。彼の作庭は彼の絵と同じ北宋水墨画的で、線の強い石を多く用いている。さすがにいずれも傑出してゐる。

この文明十四年(一四八二)には、義政が東山殿に着手した。この庭は今の慈照寺(銀閣)の庭として保存されているが、元和元年(一六一五)に宮城豊成が大平を修理したので、東山殿のみが、室町の作庭である。この庭に、銀沙灘と向月台という庭砂の抽象作品がある。砂は、今日のような高いものではなかったが、永遠のモダンである。

少し後に電安寺(りょうあんじ)の石庭が作られて今日も保存されているが、慈照寺の盛砂の上に、石を配置した形のもので、枯山水としては当然な過程で、一本一草を用いなかっことはよく理解できる。これらのものが、枯山水として本格化された先駆的な作品であった。

このころの庭園は、書院や方丈の南庭として作られたが、それはこの南庭は応仁の乱の起る前までは、儀式や法会と催す場所としての砂場であった。乱後にそれらの習慣や儀式がすたれて、この場所が不用となったので、慈照寺のように砂だけを盛り、電安寺のように石だけを配して枯山水というものが本格的に起こったのであった。

永正八年(一五一一)には、大仙院の庭の一部ができたが、このころになると方丈の横側が利用された。そして水光山嵐な石組と植栽の庭となった。その後にはできた退蔵院の庭も書院の横に作られた。

枯山水という名称の庭は、すでに平安期にもあったが、それは池や流れの水のない場所に作られた場合をいうので、前期式のものであるが、室町期に起こった枯山水は独自のもので、全庭が枯山水なのである。これを後期式と考えてよい。そしてこの枯山水は、禅的内容が大きな役割を果たしていることも特色であり、同時に抽象性の強い作品として傑出した。そして、枯山水は、京都だけで発展し、地方へは分布しなかった。したがって地方の庭は従来の池庭ばかりであった。

桃山期の庭園

桃山期はまったく戦国の時代であった。各地に群雄が割拠して戦乱が続いた。その戦乱の最中に、しかも傑出した多くの庭園ができたのはふしぎに思うが、今日あって明日の生命は保証できない武士たちは、今日を最高に楽しむことと、武運長久を祈ることと、自己の勢力を相手に誇示する等々の理由から、盛んに作庭されたのであった。

永禄五年(一五六二)には朝倉義景が、越前一乗谷に作庭した。今日荒廃しながらも保存されているが、茶室そのものの庭である。同九年には三好義隆が聚光院に枯山水を作り、今もよく保存されている。同十一年には、信長が、足利義昭のために真如院に作庭した。最近移築復元したものが残っている。

翌十二年には、信長が二条城に庭を作ったが、このとき名石の藤戸石を運び入れた。藤戸石は後に秀吉が聚光院の庭に運び、慶長三年(一五九八)に三宝院へ入れて現存している。この二条城の庭は、直後に信長が安土の城に運んでしまった。この庭には四百箇からの庭石があったということである。

このころまた義昭の関係もあって八日市の松尾神社の庭ができて今も豪華なものが保存されている。天正(一五七三)にはいると、玉鳳院の庭や、多賀大社の庭、または本法寺の庭もできた。ともに保存されている。このころ徳島の千秋園庭園もできた。

文禄(一五九五)には、福島正則が柳ノ丸に作庭したが、これが名古屋城二ノ丸の庭で、今も豪華なものを保存している。同じ三ノ丸の庭もこのころのものである。別にこのころのものとしては、大津市の聖衆来迎寺(しやうじゅうらいごうじ)の庭、阿波国分寺の庭、粉河寺の庭などもできた。いずれも石組が傑出していて、豪華なものである。そしてこのころ秀吉は、伏見城を築城して、各所に庭を作ったが今はない。

慶長三年(一五九八)になると、秀吉は三宝院に醍醐の花見を行なうために作庭した。これが三宝院の庭として今日も完全に保存されている。さらに同八年ころには、家康が京都の二条城を作って、二ノ丸に豪華な庭を作った。今もよく保存されている。同年に加藤清正は勤持院に作庭し、これも保存されている。同十三年には木下利房が高台寺下に円徳院を創建し、伏見城の庭を移した。これも保存されている。

このころまた、小堀遠州が松山城下(今の高梁市)の頼久寺に作庭した。これは大刈込の庭として傑出している。このころ遠州は大いに作庭したが、配下の賢庭や玉羽や道白のような作庭家が施工に当たった。元和(一六一五)にはいると、彦根の玄宮園ができた。広島の泉邸ができた。いずれも保存されているが、後の寛永期に起こる諸大名の大池庭に対して先駆したものである。

桃山期では、天正初年から茶の湯が流行し、茶亭と庭地とが起った。路地すなわち茶庭は、茶室にはいる「道すがら」としての、実用と景とを兼ねたもので、そこに特色があり、庭園の様式的な異色のものが一つ増加したわけである。茶庭は、日完全に保存されるものはないが、この路地には投石、飛石、敷石、石灯籠、手水鉢の類がはじめて出現したことは注意すべきである。手や口を清めるために手水鉢が必要となり、夜の茶会の照明として石灯籠が必要であったし、雨の日の茶会に飛石や敷石が必要になった。いずれも茶の湯のための実用であるとともに、景としても重視された。招四(じょうお)や利休がでて、茶庭の基本ができたが、さらに織部や遠州や宗且にいたって本格化された。桃山期の特色である。

江戸期の庭園

江戸時代にはいって、大体に天下は泰平となった。諸園に大小名が分布して、おたがい平和の中で芸術を愛好する時代となり、一面には藩主の威をほこるために、各大名がきそって大庭園を作った。初期の寛永から元禄まで(一六二四—一七〇四)の時代では、高松の栗林園(りつりんえん)、江戸の小石川橋本園、江戸城吹上の庭、二ノ丸の庭、熊本の前庭園、形世の築山園、津山の築山園、水戸の偕楽園、宇和島の御浜園、岡山の後楽園、その他ができた。いずれも大池庭を作り、東海道五十三次などの旅行趣味を入れ、または茶室や路地を付し、これまでの各時代の庭園を綜合し、集大成した形であった。これは諸大名の庭園に共通する特色でもあった。したがって、これらの傾向は、すでに元和からはじまっていた京都の桂山荘も、寛永期に完成したが、やはり一種の綜合園である。同じころに京都にできた仙洞御所の庭も、修学院御宮の庭も大池庭であるとともに綜合園であった。

そしてまた、このころでは、各寺院に大名が枯山水や茶庭や、ときには池庭も作った。京都の大徳寺本坊の庭、金地院の庭、松蓮庵(こほうあん)の庭、清水伝法院の庭、正伝寺の庭、曼殊院の庭、静山堂の庭、智積院の庭、仁和寺の庭、南禅寺本坊の庭、雄尊院の庭などが、地方では大和の慈光院の庭、近江の青岸寺の庭、円満院の庭その他があり、鳥取の興徳寺や観音院の庭、東京の伝法院の庭、宇和島の西江寺の庭、遠江の電澤寺の庭、その他が各地にできていて、とくに盛んであった。

江戸初期では、全園に多数の庭園ができて、しかも保存されているものも多い。またこの時代までのものはなかなかりっぱである。池庭も枯山水も茶庭も、まだ意欲的で、やや力強い作風である。

寛永期の池庭には、上部の築山が芝生で、山の形を美しくみせるものが多い。したがって築山には植栽をしなかつた。池も広く、護岸も強い。寛文から延宝(一六六一—一六八八)ころのものは、池が細長くなり、また元禄(一六八八)から池がまるくなった。

享保(一七二六)以後になると、池も小さくなり、池庭対岸の中央部が凸出する。石組も小さくなり、数多く用いられて弱くなってしまふ。そして小刈込が急に多く用いられる。山群などを利用した池庭が多くなる。いすれにしても、この時代では経費も少なく、意欲的でなくなる。江戸末期になるにしたがってますます庭は墮落期にはいつてりっぱなものも少なくなつて。

それでも、この時代のもので、多少みられるものは、中期のものとして、京都の寧持院、大津市の管鑿堂、長浜市の大通寺、滋賀県の西明寺、岡山市の少林寺、津山市の安國寺、広島県の岡崎氏、加計氏、鳥取県の尾崎氏、門田氏、広島県の蓮華寺、静岡県の清見寺、臨濟寺、山梨県の古長福寺、金沢の兼六園、新潟県の貞觀園の各庭園がある。

享保二十年(一七三五)には、北村逸琴が、「築山庭造伝前編」を上梓したが、当時の庭園が、いよいよ町民や百姓にまで普及したので、それらの多くの作庭には、庭師が不足する関係から、作庭の手引き書として出版されたのであった。したがってこの書は落陽の紙巻を高めるほどの売れ行を示したが、その反面、この時代から、これらの手引き書によって作庭が定形化してしまつて創作性はまったくみられなくなつた。そのうち、工書と

現代の庭園

中心として発展した当時の定形の庭師が、大名の關係で、全国に流れ、いずれも定型化した庭ばかり作ったので、傑出したものはみられなくなった。

齊藤地方に大石武字が、いって武字流を、九州地方へは石龍が、いって夢想流を、出雲地方へは沢玄丹が、いって玄丹流を、伊予地方へは吉良松崎が行って桑原流を、流行させること、もはや何々流の定形化で、庭の墮落の極に達した。

寛政十一年（一七九九）には新島軒秋里が、「都林泉名勝図会」を出版し、また、文政十一年（一八二八）には「築山庭造伝後編」を出して、ともによく學んでいる。建築も庭も茶の湯も定形化したところに大きな墮落があった。これは江戸中末期の特色である。庭園が大家に普及したことは何よりであったが、その反面定形化して創作性が皆無となったことは残念である。したがって庭園はもはや芸術的な存在ではなくなった。庭園の基本となる池の平面は、ただ単なる掘溜池にすぎなくなり、石組は本来の意味が失われて、石組としてみるべきものがなくなつた。そのかわりに、植栽が多くなり、小刈込なども多く用いられた。作者も庭師ではなく、みずから植木屋とか、花屋と称するにいたつた。まったくその通りである。

明治初年には、まだ江戸中期や末期の傾向が強く、傑出した作品はみられないが、明治末年から大正期にかけては、日清日露の戦争資金が多くの庭を作つた。金にかせて作つたので大池庭ができ、多くは借景庭園となり、自然主義的な庭がいたるところに築造された。したがって江戸中末期のものに比較すると、ややよくなつたが、借景式や自然主義の庭では、まだ本来の日本庭園にはならなかつた。しかし一般大衆には迎合したのであつた。江戸初期の総合的な傾向が強く、池あり、流れあり、滝あり、芝生の広場あり、茶室あり、茶庭ありといつたわけで、あらゆる庭の要素が一応集合されたのであつた。それに借景効果をフルに用いて、数倍、数十倍の広さにみせる方法がとられた。しかし池庭の地帯も、石組ももはや傑出したものにはならなかつた。庭に対する本来の理解のない主人が指導し、主人のいいなりに動いた職人芸の庭でしかなかつたことは惜しい。しかし大正末年から、各大学に造園科ができたり、庭園の専門学校ができたり、または庭園の研究団体の会ができ、あるいは庭園に関する多くの専門雑誌や単行本も次第に多く出版されるようになって、庭園に関する研究が徐々に進んだ關係から、昭和にはいると次第に作庭の上にも庭園本来の自覚ができはじめた。そして昭和十年以後になつて、ようやく傑出したものが生まれ出して今日にいたつてゐる。一作でも日本庭園の本来のものが生まれることを希望してやまない。



(小石川・後楽園庭園)

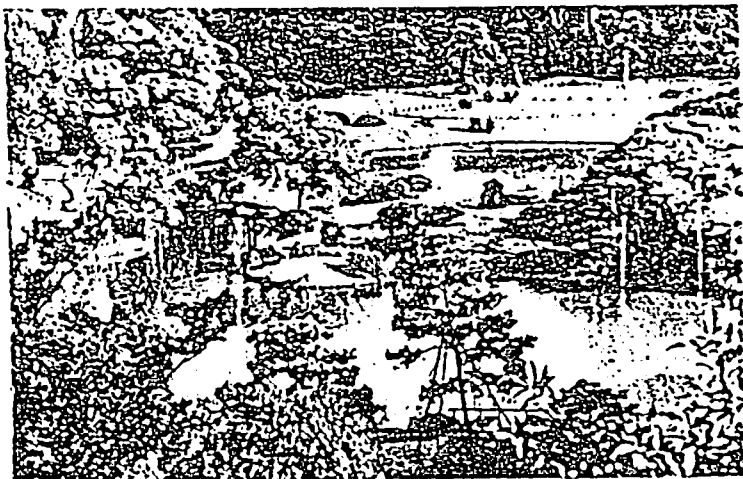
参考図書

- 文京の文化史
- 文京区の歴史
- 千代田区の歴史
- 文京区教育委員会
株名若出版会
- 全園庭園ガイドブック
京教林業協会編

○ 六義園庭園

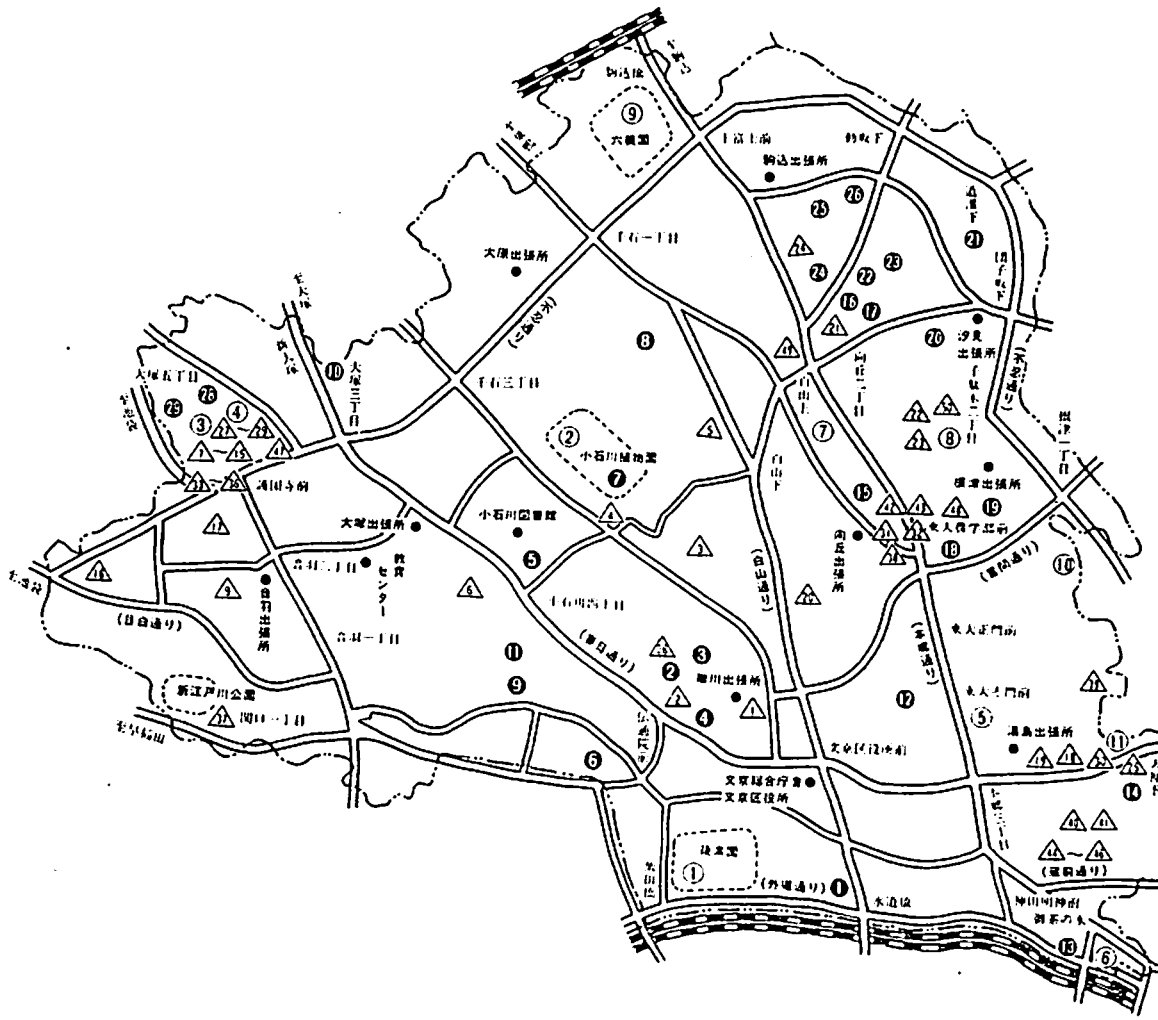
本駒込六一六

国指定文化財



(六義園庭園)

文京区内史跡分布図



文京区の文化財一覧

57. 3. 1. 現在

1. 国指定文化財

1	小石川猿蓑園
2	田東京医学校本館
3	護国寺本堂、護国寺月光殿
4	大塚先儒象所
5	山崎五郎殿御宇殿門(赤門)
6	湯島聖堂
7	高島秋帆象(大同寺)
8	根津神社
9	六義園
10	弥生三丁目遺跡
11	若崎家住宅
●建造物 6	
●史跡特別名跡 1	
●特別名跡 1	
●史跡 4	
●美術工芸品 156	
●無形文化財 3	
●選定保存技術 3	
計 174件	

2. 都指定文化財

①	湯田東湖護母致命の処
②	大宮泉象(伝通院)
③	井上首次郎宅跡
④	幸田露伴宅跡
⑤	石川啄木終焉の地
⑥	同大社の地
⑦	小石川植物園
⑧	徳本行者象(一行院)
⑨	滝亭鯉丈象(林名寺)
⑩	長有院跡
⑪	切支丹屋敷跡
⑫	徳田伏声田宅
⑬	お茶の水
⑭	湯島神社表鳥居
⑮	近藤重藏象(西善寺)
⑯	最上徳内象(蓮光寺)
⑰	平野全草象(蓮光寺)
⑱	朱舜水記念碑
⑲	弥生式土器名跡山米地
⑳	森岡外遺跡
㉑	牛床庵
㉒	安井息軒(養源寺)
㉓	西村茂樹象(養源寺)
㉔	原氏象所(湖泉寺)
㉕	駒込名主屋敷
㉖	駒込遺跡
㉗	駒込遺跡出土品
㉘	亮賢留正象(護国寺)
㉙	三茶実美象(護国寺)
計 29件	

3. 区指定文化財

△	本造開闢王坐像(原覚寺)
△	本造大黒天坐像(福聚院)
△	美段女象(念速寺)
△	鐘鐺村御自覚(新福寺)
△	大田山敬象(本念寺)
△	滝沢馬琴象(深光寺)
△	合羽町神楽中塔(護国寺)
△	護国寺大師堂(護国寺)
△	護国寺染師堂(護国寺)
△	地藏菩薩立像(護国寺)
△	不動明王像(護国寺)
△	亮賢留正像(護国寺)
△	騎竜観音菩薩(護国寺)
△	松馬十六面(護国寺)
△	鳩杖(護国寺)
△	日本女子大学成箱記念講堂
△	五葉庵記(地2点)(竹林寺)
△	胡条着色十六羅漢図(駒祥院)
△	春日局書簡(駒祥院)
△	樋口一乗終焉の地(興陽社)
△	栢方洪庵象(高林寺)
△	徳川氏朱印状(根津神社)
△	徳川家官袍衣塚(根津神社)
△	古祥寺経藏
△	湯島天神門前廻廊(湯島神社)
△	湯島山境西大徳園の平庭園(伝通院)
△	護国寺惣門
△	護国寺鐘楼(付梵鐘)
△	隆光留正像(護国寺)
△	春日局像(駒祥院)

△	高崎屋松園(渡辺福次)
△	昇竜園(渡辺福次)
△	聖観音菩薩像(護国)
△	護国寺日記(護国)
△	護持院日記(護国)
△	隆光留正日記(護国)
△	神田上水取水口大元町
△	追分一里塚
△	講安寺本堂・庫
△	大成徳明王像(雲雲)
△	五秘密像(雲雲)
△	音月の舞団(渡辺福次)
△	2世牛長再像(渡辺福次)
△	茶師三尊像(雲雲)
△	不動明王二童子像(雲雲)
△	愛染明王像(雲雲)
△	如来形坐像(護国)
△	西教寺表門(西教)
△	阿弥陀如来坐像(仙竜)
△	神樹・付獅子頭(根津神社)
計 50	